

逗子市役所緑政課 協力事業

池子の森自然公園 昆虫類調査報告書

(2020年6月30日版)



三浦半島昆虫研究会

本調査について

調査場所および背景

調査場所である「池子の森自然公園」は逗子市池子および久木に位置し、池子米軍住宅地区内の40ヘクタール（図1の点線の囲み）を逗子市が共同使用することで整備された、緑地および運動施設である。緑地エリアは2016年3月から現在も土・日・休日に限って開園している。

本調査は、体協事務所（図1の①。以下同）前を出発して久木トンネル（②）を抜け、サポートルーム（③）手前を右に折れて東尾根－中尾根の間の谷戸（④）まで（東エリア）と、サポートルームの先にある道路標識（⑤）を境に、その先にあるいくつかの袋小路状の谷戸（⑧、⑨、⑪～⑬）を含む南北に細長い広場（⑥、⑦、⑩）や、広場にそって位置する池や小川（西エリア）までの、2つのコースを歩いて行った。

調査場所は、2006年6月から2012年7月まで約6年にわたり、当会における「三浦半島の米海軍施設昆虫調査」（『かまくらちょう89号「特集：三浦半島の米海軍施設 昆虫調査報告書（三浦半島米海軍施設昆虫調査団）」、以降「前報」（調査概要は、大場ほか[2016]を参照）の対象地のひとつ、「逗子市池子米軍家族住宅（池子施設）」の一部である。前述のとおり、この場所が逗子市との共同使用に置かれる際に、当会では逗子市市役所緑政課に対して前報に基づく情報提供とともに、この場所の自然環境調査を申し入れをし許可をいただき、本調査が実現した。

本調査は、逗子市役所にとって米海軍との「池子の森自然公園」の共同使用下での自然環境の変化に配慮した管理・利用を模索するための基礎調査としての意味をもつだけでなく、当会にとって前出の「池子施設」での記録の大部分が本調査の調査場所である同「公園」に相当する範囲で採集・確認されたものであることから、「池子施設」の再調査としての意味も合わせもっている。

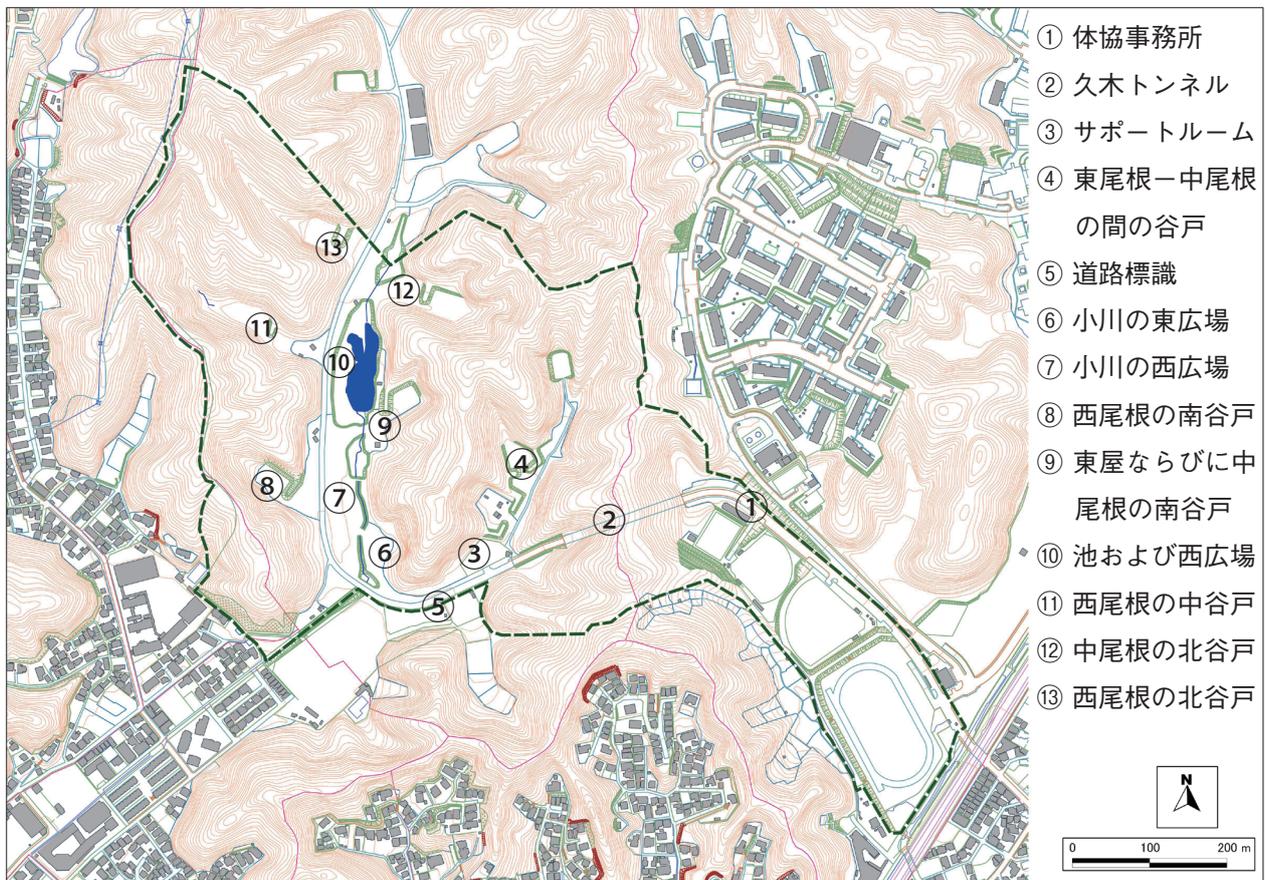


図1 調査場所。点線は逗子市「池子の森自然公園」のエリア。

調査期間

調査期間は、逗子市役所緑政課との協議のもと2017年7月から2019年6月までの2年間とした。調査日・調査時間・調査人数・確認種数などを右表に示す。調査日は、一般利用者が入園しない木曜日とし、季節によって昆虫類の多寡が予想されたため、3月から10月までの温暖期間は、第2・4木曜日の月2回、11月から翌年2月までの寒冷期間は第2木曜日の月1回とし、天候不順の時は翌金曜日に延期した。調査時間は、温暖期間は午前9時から正午まで、寒冷期間は午前10時から正午までとした。灯火採集を中心とした夜間調査(後述)を実施した際は、日中の調査を夕方からにずらして実施した。

右表の確認種数は、調査日ごとに逗子市役所緑政課に報告するため、その日のうちに参加した調査員から把握できた範囲での種リストを集計した種数である。2018年9月以降は、同課の要望に沿った形式として園内を東/西二つのエリア(後述)に分けて集計・報告した。

右表より、通常調査は38回、夜間調査は3回、それぞれ実施し、参加した調査員はのべ313人に上った。

調査方法

通常は、「調査場所および背景」に記したコース(図1)に沿った、目視探索による個体確認・写真撮影のほか、ビーティングやスウィーピングによる探索、ネット捕獲による詳細な観察によって昆虫を記録し、さらに同定標本や証拠標本の必要に応じて最小限の採集を行った。

夜間調査では、灯火採集を始める前の、薄暮の時間帯で活動するトンボ類(主にヤンマ類)なども観察した。灯火採集は、池付近の東屋(図1の⑨)近くに白布を張り、発電機によってブラックライトや水銀灯を点灯させ、昆虫を集めた。また、灯火から離れた周辺でも、樹木の枝葉、やや丈の高い草先等で目視探索やスウィーピング等を行った。

採集した標本は、すべて横須賀市自然・人文博物館に収蔵した。

表 調査日・調査時間・調査人数・確認種数のまとめ.

<2017年>				
調査日(曜)	時 間	調査員数	確認種数	備 考
7/13(木)	9:00 - 11:00	8人	60	
7/27(木)	9:00 - 12:00	8人	79	
8/10(木)	9:00 - 12:00	8人	105	
8/24(木)	9:00 - 12:00	9人	68	
8/30(木)	17:00 - 20:00	11人	124	夜間調査
9/14(木)	9:00 - 12:00	9人	88	
9/29(金)	9:00 - 12:00	9人	53	
10/12(木)	9:00 - 12:00	7人	85	
10/26(木)	9:00 - 12:00	8人	37	
11/09(木)	10:00 - 12:00	5人	40	
12/14(木)	10:00 - 12:00	6人	12	
<2018年>				
調査日(曜)	時 間	調査員数	確認種数	備 考
1/11(木)	10:00 - 12:00	3人	7	
1/25(木)	15:00 - 20:00	10人	7	夜間調査
2/08(木)	10:00 - 12:00	6人	7	
3/15(木)	9:00 - 12:00	7人	21	
3/29(木)	9:00 - 12:00	8人	40	
4/12(木)	9:00 - 12:00	8人	85	
4/26(木)	9:00 - 12:00	10人	160	
5/10(木)	9:00 - 12:00	9人	160	
5/31(木)	8:30 - 10:30	9人	72	
6/14(木)	9:00 - 12:00	9人	92	
6/28(木)	9:00 - 12:00	10人	94	
7/12(木)	9:00 - 12:00	3人	38	
7/26(木)	9:00 - 12:00	10人	83	
8/16(木)	16:00 - 19:30	18人	154	夜間調査
8/30(木)	9:00 - 12:00	10人	84	
9/20(木)	9:00 - 12:00	9人	38	東 5 / 西 33
9/28(木)	9:00 - 12:00	7人	79	東 25 / 西 54
10/11(木)	9:00 - 12:00	7人	62	東 23 / 西 39
10/25(木)	9:00 - 12:00	7人	45	東 18 / 西 27
11/08(木)	10:00 - 12:00	7人	51	東 24 / 西 27
12/13(木)	10:00 - 12:00	6人	18	東 7 / 西 11
<2019年>				
調査日(曜)	時 間	調査員数	確認種数	備 考
1/10(木)	10:00 - 12:00	6人	19	東 6 / 西 13
2/14(木)	10:00 - 12:00	6人	21	東 9 / 西 12
3/14(木)	9:00 - 12:00	10人	42	東 13 / 西 29
3/28(木)	9:00 - 12:00	10人	41	東 18 / 西 23
4/11(木)	9:00 - 12:00	6人	35	東 6 / 西 29
5/16(木)	9:00 - 12:00	7人	112	東 23 / 西 89
5/23(木)	9:00 - 12:00	11人	125	東 38 / 西 87
6/13(木)	9:00 - 12:00	11人	121	東 46 / 西 75
6/27(木)	9:00 - 12:00	11人	141	東 49 / 西 92

本調査の結果：目ごとの結果

次ページから本調査の結果を記す。当会の限られた人材のもとでは、本調査によって調査地における全ての昆虫類を記録したとは言い難いが、トンボ目、バッタ目、コウチュウ目（カミキリムシ類、ホタル科、その他）、チョウ目（ガ類、チョウ類）、カメムシ目、ハエ目、ハチ目（有剣類）、その他いくつかの目（カワゲラ目、ナナフシ目、カマキリ目、ゴキブリ目、チャタテムシ目、アミメカゲロウ目、シリアゲムシ目、トビケラ目）について、それぞれ記す。

凡 例

次ページ以降の各目の結果では、確認された種をリストアップした上で、希少種やこの場所の環境整備のヒントになりそうな生態をもつ種など特筆すべき一部の種について解説するとともに、目全体についてのコメントも付した。特筆すべき種については、なるべく生態写真や標本写真を付した。

備 考

通常開園日や別の調査における、前述の「調査期間」外に目撃した情報についても、参考記録であることを明示して記す。

文 献

各目で参照している「前報」の引用元については、本来『かまくらちょう 89号』において対応する各目の記事を引用すべきであるが、本報では省略する。なお、ハチ目については、同号の記載内容に大きな変更が生じたため、以下の訂正記事を参照されたい。

鈴木 裕, 2017. 三浦半島の米軍施設のハチ類 (訂正と追加). かまくらちょう, (92): 49-57.

トンボ目

トンボ目については、今回の調査で8科30種が確認できた。

トンボ目は水生昆虫であるため、その生息は水辺の環境によって大きく影響される。本調査では公園区域内の水辺はかなり広く調査できたので、当地に生息する可能性のあるトンボ目の大部分を確認できたものと考えられる。

調査場所のトンボ目の特徴としては、まず池に由来する種類の存在があげられる。コサナエ、ウチワヤンマ、オオヤマトンボ、コフキトンボといった種は、ため池の荒廃や減少が続く神奈川東部ではかなり希少になっており、これらの種類の生息は当地の大きな特徴といえる。

一方、流水性種はかなりその生息が危ぶまれる状況であり、アサヒナカワトンボ、ハグロトンボ、ミルンヤンマ、ヤマサナエ、コオニヤンマ、オニヤンマがかろうじて確認されているが総じて個体数は少ない。さらに、本来生息したであろうコシボソヤンマやコヤマトンボといった種類は確認されておらず、さらにダビドサナエも公園内に生息地は確認できていない。最も普通種であるアサヒナカワトンボですら僅かな個体数しか発生していないことを考えると、流水性トンボ類の生息環境はかなり厳しいものといわざるを得ない。

また、これは三浦半島全般で言える事であるが、水田・湿地に生息するトンボ類の記録が極めて少ない。特にこういった環境に依存するアカネ類で生息が確実な種類はリスアカネのみであり、湿地的要素の欠落が大きく関係している。その中ではサラサヤンマの確認は非常に興味深い。

トンボ類について本調査で記録されなかったにもかかわらず、当地に生息する可能性の残された種類はわずかであり、移動個体を除けば新たな種類を確認できる可能性は低いといえるだろう。

確認種のリスト

アオイトトンボ科

1. オオアオイトトンボ *Lestes temporalis* Selys

カワトンボ科

2. アサヒナカワトンボ *Mnais pruinosa* Selys
3. ハグロトンボ *Atrocalopteryx atrata* (Selys)

イトトンボ科

4. ホソミイトトンボ *Aciagrion migratum* Selys
5. アオモンイトトンボ *Ischnura senegalensis* (Rambur)
6. アジアイトトンボ *Ischnura asiatica* Brauer

ヤンマ科

7. サラサヤンマ *Sarasaeshna pryeri* (Martin)
8. ミルンヤンマ *Planaeschna milnei* (Selys)
9. マルタンヤンマ *Anaciaeschna martini* (Selys)
10. ヤブヤンマ *Polycanthagyna melanictera* (Selys)
11. ギンヤンマ *Anax parthenope* (Selys)
12. クロスジギンヤンマ *Anax nigrofasciatus* Oguma

サナエトンボ科

13. ウチワヤンマ *Sinictnogomphus clavatus* (Fabricius)
14. コオニヤンマ *Sieboldius albardae* Selys

15. コサナエ *Trigomphus melampus* (Selys)

16. ヤマサナエ *Asiagomphus melaenops* (Selys)

オニヤンマ科

17. オニヤンマ *Anotogaster sieboldii* (Selys)

ヤマトンボ科

18. オオヤマトンボ *Ephthalma elegans* (Brauer)

トンボ科

19. ナツアカネ *Sympetrum darwinianum* (Selys)

20. リスアカネ *Sympetrum risi* Barteneff

21. ノシメトンボ *Sympetrum infuscatum* (Selys)

22. アキアカネ *Sympetrum frequens* (Selys)

23. ネキトンボ *Sympetrum speciosum* Oguma

24. コシアキトンボ *Pseudothemis zonata* (Burmeister)

25. コフキトンボ *Deielia phaon* (Selys)

26. ショウジョウトンボ *Crocothemis servilia* (Drury)

27. ウスバキトンボ *Pantala flavescens* (Fabricius)

28. シオカラトンボ *Orthetrum albistylum* (Selys)

29. シオヤトンボ *Orthetrum japonicum* (Uhler)

30. オオシオカラトンボ *Orthetrum melania* (Selys)

特筆すべき種等についてのコメント

サラサヤンマ [写真1]

湿地に生息するヤンマ類で成虫が確認された。三浦半島では過去には小網代が多産地として有名であったが、同地では公園化にともない個体数は激減しており、現在、確実な生息場所は数えるほどしかない。本調査で確認できた個体数が少ないため生息状況は定かではないが、通常立ち入りの難しい池の上流部や枝谷戸の奥で生息している可能性は否定できない。現在、逗子市では本種が生息する可能性がある唯一の場所となっている。

コサナエ [写真2, 3]

北方系のトンボで、もともと神奈川県でも生息地が少ない。当地は現在では県内ほぼ唯一の多産地となっている。本種が当地に多数生息する理由の一つとして、池にブラックバスやブルーギルが導入されていない事があげられるだろう。現状では個体数も多く安定して発生しているが、これらの外来魚が持ち込まれるような事態となってしまうと容易に絶滅しかねない。当地のシンボルのトンボであり、本種

の保護は非常に重要なものとなると考えられる。

ウチワヤンマ [写真4]

泥深く広い池に生息するトンボで、そのような環境の多くが失われた三浦半島では生息場所のごく限定される。当地は本種が生息する数少ない場所の一つである。本種以外にも、園内の池に依存する種類も多く、トンボ類の多様性確保のためには池の保全が非常に重要である事は言うまでもない。

流水性種群 [写真5]

流水性トンボ類のうち、ミルンヤンマ・オニヤンマ・コオニヤンマ・ヤマサナエはいずれも幼虫期に数年を要することが知られており、これらのトンボ類が生息するという事は、当地の流水が水が絶える事なく流れているという事を示唆している。ただし、やや水深のある場所を好むコシボソヤンマやコヤマトンボが未確認である事からも、水量的には極めて乏しい事が考えられ、園内にダビドサナエの生息が確認できない事の一因ともなっていると考えられる。



写真1 サラサヤンマ
(参考：横須賀市長坂).



写真2 コサナエ (♂)
(2019年5月23日).



写真3 コサナエ (♀)
(2019年4月21日).



写真4 ウチワヤンマ
(2017年7月13日).

まとめ

トンボ目は水生昆虫であり、かつ飛翔力が強いために、1 個体成虫が確認されたからといって、すぐに生息する証拠になるものではない。今後は幼虫(ヤゴ)の確認も含めた調査が必要となるであろう。



写真5 コオニヤンマ
(2017年7月13日).

バッタ目

今回の調査で11科46種が確認できた。これは現在三浦半島で確認されているバッタ目のおよそ60%に該当する。

調査場所のバッタ目の特徴として、まず草原性要素の欠落があげられる。園内は比較的広く短く草が茂るエリアがあり、ススキやクズの生い茂る環境も残されているが、近隣地域であれば確実に観察できるカヤキリ・ヒガシキリギリス・ツユムシ・コバネヒメギスといった、大型のキリギリス類が全く記録されていない。このことは現在、園内にあるオギ・ススキ・クズなどが茂るような環境は、もともと返還以前には存在しておらず、かなり最近になって形成されてきた可能性が高いことを示唆するものといえよう。その中では草原性の希少種であるクルマバッタの存在は特異ともいえるが、本種は比較的移動性が強いようで、三浦半島では生息場所も比較的多く、最近になって近隣から移動してきた個体の子孫とも考えられる。

また、樹林を好むヒメスズヤクロスジコバネササキリモドキも記録できていないが、これは立ち入りが可能であった時間やエリアが限定されたことに起因するとも考えられる。

さらに湿生草地を好むハネナガヒシバッタなども未確認であるが、これは公園域内にこういった種の好むような環境が残されていないことに起因するとも考えられる。

確認種のリスト

カマドウマ科

1. マダラカマドウマ *Diestrammena japonica* Blatchley

キリギリス科

2. ヤブキリ *Tettigonia orientalis* Uvarov
3. ヒメギス *Eobiana engelhardti* (Bey-Bienko)
4. クサキリ *Ruspolia lineosa* (Walker)
5. ヒサゴクサキリ *Palaeograecia lutea* (Matsumura et Shiraki)
6. クビキリギス *Euconocephalus varius* (Walker)
7. ホシササキリ *Conocephalus maculatus* (le Guillou)
8. ウスイロササキリ *Conocephalus chinensis* (Redtenbacher)
9. ハヤシノウマオイ *Hexacentrus hareyamai* Furukawa

ツユムシ科

10. アシグロツユムシ *Phaneropter nigroantennata* Brunner von Wattenwyl
11. ヒメクダマキモドキ *Phaulula macilenta* Ichikawa
12. サトクダマキモドキ *Holichlora japonica* Brunner von Wattenwyl
13. ヤマクダマキモドキ *Holichlota longifissa* Matsumura et Shiraki

コオロギ科

14. エンマコオロギ *Teleogryllus emma* (Ohmachi et Matsumura)
15. ヒメコオロギ *Comidogryllus nipponensis* (Shiraki)
16. モリオカメコオロギ *Loxoblemmus sylvestris* Matsuura
17. ハラオカメコオロギ *Loxoblemmus campestris* Matsuura
18. ツツレサセコオロギ *Velarifictorus micado* (Saussure)

マツムシ科

19. クチキコオロギ *Duolandrevus ivani* (Gorochov)
20. アオマツムシ *Truljalalis hibinonis* (Matsumura)
21. カンタン *Oecanthus longicauda* Matsumura

ヒバリモドキ科

22. ウスグモスズ *Amusurgus genji* (Furukawa)
23. カヤヒバリ *Natula pallidula* (Matsumura)
24. キンヒバリ *Natula matsuurai* Sugimoto
25. クサヒバリ *Svistella bifasciata* (Shiraki)
26. ヤチスズ *Pteronemobius ohmachi* (Shiraki)
27. マダラスズ *Dianemobius nigrofasciatus* (Matsumura)
28. シバスズ *Polionemobius mikado* (Shiraki)

カネタタキ科

29. カネタタキ *Ornebius kanetataki* (Matsumura)

ノミバッタ科

30. ノミバッタ *Xya japonica* (de Haan)

ヒシバッタ科

31. トゲヒシバッタ *Criotettix jaonicus* (de Haan)
32. コバネヒシバッタ *Formosatettix larvatus* Bey-
Bienko
33. ハラヒシバッタ *Tetrix japonica* (Bolivar)

オンブバッタ科

34. オンブバッタ *Atractomorpha lata* (Motschulsky)

バッタ科

35. ヤマトフキバッタ *Parapodisma setouchiensis*
Inoue
36. メスアカフキバッタ *Parapodisma tenryuensis*

Kobayashi

37. ツチイナゴ *Patanga japonica* (Bolivar)
38. コバネイナゴ *Oxya yezoensis* Shiraki
39. ショウリョウバッタ *Acrida cinerea* (Thunberg)
40. ショウリョウバッタモドキ *Gonista bicolor* (de
Haan)
41. ヒナバッタ *Glyptobothrus maritimus maritimus*
(Mistshenko)
42. マダラバッタ *Aiolopus thalassinus tamulus*
(Fabricius)
43. トノサマバッタ *Locusta migratoria* (Linnaeus)
44. クルマバッタ *Gastrimargus marmoratus*
(Thunberg)
45. クルマバッタモドキ *Oedaleus infernalis*
Saussure
46. イボバッタ *Trilophidia japonica* Saussure

特筆すべき種等についてのコメント

ヒメコオロギ [写真1]

ススキが生い茂るような場所を好むとされる小型のコオロギ。神奈川県での生息状況は不明であるが、かなり記録は少ない。本調査ではライトトラップに飛来した個体が確認されたが、当地を代表する特徴的なコオロギ類といえよう。園内のごく狭いススキに依存していると考えられ、過度の草刈りによって容易に絶滅する可能性がある。

キンヒバリ

湿生草地に依存する種類で、当地では池の周辺の葦原で発生している。鳴き声は多く聞かれるため個体数は少なくないと考えられるが、成虫を確認するのは非常に困難な種であり、今回も鳴き声による記

録にとどまった。乾燥した場所には生息できないため、葦原に過度に手入れをすると容易に消滅する。

ヤマクダマキモドキ [写真2]

名前のごとく、やや山地性のクダマキモドキ類。過去には三浦半島で記録が散見されたが、現在確実な生息場所はほとんどなく、当地が極めて貴重な生息場所となっている。

ヤマトフキバッタ [写真3]

林縁に生息するフキバッタ類。同所的に生息するメスアカフキバッタは三浦半島では全般的に生息するが、本種は現在のところ当地が三浦半島における生息の南限となっている。同様の分布を示す種類としては、クツワムシやササキリがあるが、両種は今



写真1 ヒメコオロギ
(2017年8月30日).



写真2 ヤマトクダマキモドキ
(2017年8月30日).



写真3 ヤマトフキバッタ
(2017年8月10日).



写真4 クルマバッタ (褐色型♀)
(2018年8月16日).

のところ確認されていない。

クルマバッタ [写真4]

クズの生い茂るような草はらを好む大型のバッタ。当地では生息に適した環境がほとんどないため、観察された個体数は非常に少ない。単に草むらを邪魔ものとして刈り取ってしまうのではなく、安全性に配慮したうえで多様な環境を残していかないと、容易に姿を消すであろう。

マダラバッタ [写真5]

海岸近くの草原のような、裸地に近いような草原を好むバッタ。全国的には普通種だが、三浦半島での生息場所は少なく、逗子市では現在のところ確認できている唯一の生息地である。園内での生息場所は東エリアの芝生付近で、しばしば米軍関係車両が乗り入れ、駐車をしている。通常の公園管理であれば生息は安泰のはずであるが、平日の米軍関係者の



写真5 マダラバッタ
(2019年5月23日).

車両乗り入れによっては消滅してしまう可能性もある。

まとめ

バッタ目は特にキリギリス類やコオロギ類のように夜行性種も多く、今回の調査で全容が把握できたとは言い難い。また、アリの巣に住むアリヅカコオロギ類のように特殊な環境を好むため、通常の調査では発見しがたい種類もある。当地のバッタ目の全容を把握するためには、これまでのような日中に目視に頼る調査ばかりでなく、他の調査方法も検討しなければならないだろう。

コウチュウ目 (カミキリムシ類)

甲虫目カミキリムシ類については、41種が記録された。

この種類数は、限られた調査地域の面積、調査時間の短さ、同じ時間帯での調査等の、かなり限定的な条件内での調査であることを考慮すれば、かなりの種数をカバーできているものと思われる。

2006年以降数年にわたって米軍施設内での昆虫調査（以下「前報」と呼ぶ）を実施したが、その時点での池子地区でのカミキリムシ類の記録種数は30種に過ぎない。

今回新たに記録された種類は18種を数えたが、逆に前報において記録されていて今回見られなかった種類は9種だけであった。

確認種のリスト

ホソカミキリムシ科

1. ホソカミキリ *Distenia gracilis* (Blessig)

カミキリムシ科

2. ヒナルリハナカミキリ *Dinoptera minuta* (Gebler)
3. ヤツボシハナカミキリ *Leptura mimica modicenotata* Pic
4. ヨツスジハナカミキリ *Leptura ochraceofasciata* (Motschulsky)
5. リュウキュウヒメカミキリ *Ceresium fuscum* Matsumura et Matsushita
6. タイワンメダカカミキリ *Stenhomalus taiwanus* Matsushita
7. コジマヒゲナガコバネカミキリ *Glaphyra kojimai* (Matsushita)
8. ベニカミキリ *Purpuricenus temminckii* (Guerin-Meneville)
9. シラケトラカミキリ *Clytus melaenus* Bates
10. ヨツスジトラカミキリ *Chlorophorus quinquefasciatus* (Castelnau et Gory)
11. フタオビミドリトラカミキリ *Chlorophorus muscosus* (Bates)
12. ヒメクロトラカミキリ *Rhaphuma diminuta* (Bates)
13. キイロトラカミキリ *Grammographus notabilis* (Pascoe)
14. トゲヒゲトラカミキリ *Demonax transilis* Bates
15. トガリバアカネトラカミキリ *Anaglyptus niponensis* Bates
16. ナガゴマフカミキリ *Mesosa longipennis* Bates
17. シナノクロフカミキリ *Asaperda agapanthina* Bates
18. カノコサビカミキリ *Apomecyna naevia* Bates
19. コブスジサビカミキリ *Atimura japonica* Bates
20. ドウボソカミキリ *Pseudocalamobius japonicus* (Bates)
21. ニイジマチビカミキリ *Egesina bifasciana* Matsushita
22. アトジロサビカミキリ *Pterolophia zonata* (Bates)
23. トガリシロオビサビカミキリ *Pterolophia caudata* (Bates)
24. アトモンサビカミキリ *Pterolophia granulata* (Motschulsky)
25. ナカジロサビカミキリ *Pterolophia jugosa* (Bates)
26. ワモンサビカミキリ *Pterolophia annulata* (Chevrolat)
27. ヒメヒゲナガカミキリ *Monochamus subfasciatus* (Bates)
28. ビロードカミキリ *Acalolepta fraudatrix* (Bates)
29. ヤハズカミキリ *Uraecha bimaculata* Thomson
30. キボシカミキリ *Psacothoea hilaris* (Pascoe)
31. ホシベニカミキリ *Eupromus ruber* (Dalman)
32. チャボヒゲナガカミキリ *Xenicotela pardalina* (Bates)
33. ヒトオビアラゲカミキリ *Rhopaloscelis unifasciata* Blessig
34. ヘリグロチビコブカミキリ *Miccolamia takakuwai* Hasegawa et N.Ohbayashi
35. クモガタケシカミキリ *Exocentrus fasciolatus* Bates
36. ケシカミキリ *Sciades tonsus* (Bates)
37. ヤツメカミキリ *Eutetrappa ocelota* (Bates)
38. ラミーカミキリ *Paraglenea fortunei* (Saunders)

39. オニグルミノキモンカミキリ *Menesia*

flavotecta Heyden

40. シラホシカミキリ *Glenea relictata* Pascoe

41. ホソキリソゴカミキリ *Oberea infranigrescens*

Breuning

特筆すべき種等についてのコメント

オニグルミノキモンカミキリ [写真1]

この1 cm ほどのかわいいカミキリムシはオニグルミを食樹としており、通常平野部では非常に少ない種類である。三浦半島では過去60年の間に記録されたのは池子を含めても4カ所に過ぎない。しかも池子を除く3カ所ではそれぞれ各1頭の記録だけである。これに対して池子地区では前報、今回調査ともかなりの個体数を確認することができた。このことから池子地区では安定して発生しているものといえる。

特に、図1の⑨にあるオニグルミは、4月から8月まで本種を見ることができた貴重な木で、ぜひ保全していただきたい。なお、前報では同図⑦に点在するオニグルミの木でも本種を見つけたが、今回は残念ながら確認できなかった。

リュウキュウヒメカミキリ

この地味なカミキリムシは、本来は南西諸島を中心に生息しており、本州では千葉県・房総半島と神奈川県でのみ記録されている。神奈川県では横須賀市猿島と大井町ならびに逗子市と鎌倉市にまたがる浄明寺緑地を中心とした一帯でわずかに記録されていた。しかも逗子市の個体群は奄美大島個体群に非常に似かよっており、カミキリムシの分布を研究する上で重要な材料となっている。池子地区でこの個体群に属する個体が得られたことは注目すべきことと考える。

本種の食樹は各種の広葉樹で大変幅広く、逗子市近辺での食樹は明らかになっていない。

なお、ヒメカミキリ類は夜行性のため、灯火などによく集まる習性があることが知られている。

まとめ

昆虫調査、特に甲虫類の調査は膨大な種類数と広い生息環境を持つため、何十年というスパンで行わないと、一部の成果から判断してしまうと表層的な結果を導くことになる可能性が高い。せっかくの調査を中途半端なものに終わらせるのは誠にもったいない。ぜひ永続的な調査をさせていただきたくお願い申し上げます。

なお、具体的な提言として申し上げたいことは、一般入園者の安全等のために公園整備をされる際、立ち枯れ木や枯れ枝を伐採、および草本類の刈り取り等を行われると思いますが、それらをすべて廃棄するのではなく、一部を一般入園者の目につかない場所などへ、まとめて積んでおくことはできないでしょうか。昆虫類にとってそこは恰好な住処となるはずです。ご高配くださるよう重ねてお願い申し上げます。

フタコブルリハナカミキリ

前報及び今回調査では生息が確認できなかった種類である。本種は三浦半島全域で生息が確認されている種類で、しかもミズキに依拠した生活をしていることが知られている。それにも関わらず前回・今回調査とも記録されなかったことは、なんとも不可解としか言いようがない。

成虫は5月から6月にかけて、ミズキ、スダジイ、ハゼ、ハコネウツギ、ノイバラ等の花に集まり、大型で美しい上翅と独特の形をしているため人気が高い。飛翔する姿も目立ち、調査対象としては最適な種類なのである。

池子地区にはミズキの大木も生育しており、本種の生息になんら不足はないように見える。単に調査不足のため確認できていないと考えるのが妥当であろう。



写真1 オニグルミノキモンカミキリ
(2019年6月27日)。

コウチュウ目 (ホタル科)

前報では、ムネクリイロボタル *Cyphonocerus ruficollis* Kiesenwetter、クロマドボタル *Pyrocoelia fumosa* (Gorham)、オバボタル *Lucidina biplagiata* (Motschulsky)、スジグロボタル *Pristolytus sagulatus sagulatus* Gorham、ヘイケボタル *Aquatica lateralis* (Motschulsky)、ゲンジボタル *Luciola cruciate* Motschulsky の6種が記録されているが、本調査では、そのうちムネクリイロボタル (写真1)、オバボタル (写真2)、ゲンジボタル (写真3) の3種が確認されたに過ぎない。

ムネクリイロボタル、オバボタルは幼虫から成虫までを陸で生活する陸生ホタルである。成虫は昼行性で発生時期には比較的普通に見られる。

一方、ゲンジボタルやヘイケボタルは幼虫期を水辺で過ごす水生ホタルであり、成虫は夜間に活動する。今回の調査では夜間に活動するホタルを対象としていなかったため、ヘイケボタルは確認できなかったが、自然環境調査会「ホタルの会」により池子の森自然公園での継続した発生が確認されている (逗子市緑政課・自然環境調査会「ホタルの会」, 2019)。

また、今回の調査で確認されなかったスジグロボタルは、幼虫は湿地に生息する半水生のホタルである。生息地が限られ、神奈川県レッドデータ生物調査報告書では準絶滅危惧に指定されている (高橋, 2006)。池子の森自然公園では本種の幼虫が生息できるような湿地があることから、今後の調査で発見される可能性があり、注目する必要がある。



写真1 ムネクリイロボタル
(2018年5月31日).



写真2 オバボタル
(2018年5月31日).



写真3 ゲンジボタル
(2018年5月31日).

文 献

高橋和弘, 2006. ホタル類. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書. pp. 393-394

逗子市緑政課・自然環境調査会「ホタルの会」, 2019. 池子の森自然公園のホタル (2016-2019)

コウチュウ目 (カミキリムシ類・ホタル科以外)

本目は多くの科ならびに膨大な種を擁する分類群の一つであり、別途記載したカミキリムシ類やホタル科以外の各科を広くカバーすることは難しい。今回の調査で確認した甲虫目の多くは、枯葉や枯枝の下に正方形の布等を差し込み叩いて昆虫を落とす「叩き網」で得られたものであるが、これらは微小な種が多く、全てにわたって正確な種同定を行うのに十分な人材に欠けていたことを、あらかじめお断りする。

本章で挙げた甲虫目は、約 40 科約 230 種に上った。種類数の多かったグループは、ゾウムシ類 (45 種)、ハムシ類 (40 種)、タマムシ類 (17 種)、オサムシ類 (16 種)、コガネムシ類 (12 種) であった。その他、記録された科は次のとおりである：シテムシ科、シバンムシ科、ジョウカイモドキ科、チビキカワムシ科、チビシテムシ科、ツツキノコムシ科、デオキノコムシ科、テントウムシダマシ科、ナガクチキムシ科、マルハナノミ科、ヒメキノコムシ科、ヒメハナムシ科、ヒラタムシ科、ホソカタムシ科、ベニボタル科、テントウムシ科、アカハネムシ科、クワガタムシ科、カミキリモドキ科、ジョウカイボン科、クキムシ科、オオキノコムシ科、コメツキムシ科、コメツキモドキ科、ケシキスイ科、ハネカクシ科、アリモドキ科、ゴミムシダマシ科、カッコウムシ科、カツオブシムシ科、キノコムシダマシ科、クチキムシダマシ科、コキノコムシ科、コクヌスト科。

特筆すべき種等についてのコメント

クワガタムシ科

クワガタとノコギリクワガタの 2 種を各 1 回記録した。幼虫の生育環境に問題は無いように思われるが、本科の成虫は夜間にコナラやカシ類の樹液や灯火に集まり、早朝にはその居残り個体を観察することが出来るので、記録が少ないのは調査時間帯が原因と思われる。

前述の 2 種以外に生息が見込まれる種には、①ミヤマクワガタ (夜間に限らず昼間でも活動しクヌギ、コナラ、タブ等の樹液に見受けられるので樹液の出ている樹を見つけられれば可能性は高い)、②スジクワガタ (昼間は樹の洞や樹皮下に隠れて発見は容易でないが可能性はある)、③ヒラタクワガタ (調査場所の近隣にて街灯への飛来が確認されている)。

タマムシ科

前報では池子地区の種類数は 11 種であったが、今回の調査で新たに 8 種が増え、逆に今回記録されなかったのが 2 種だけあった。

タマムシ科は林の周辺部や林内に出来た空間部の樹木の梢などに集まる習性があり、その様な所を網で掬う (スウィーピング) 方法が有効的である。甲虫全般に共通するが、食樹とする植物等には特に集中するので気に掛けて調査した。

今回の調査で新たに記録した 8 種は次のとおりである：ムネアカナガタマムシ (西日本の平地に多く近年、東日本に勢力を拡大中。調査地では食樹のエ

ノキ若葉や枯枝に多くの個体を確認)、クワナガタマムシ (クワの枯れ枝)、ヒコサンナガタマムシ (ミズキの枯れ枝)、ヒメアサギナガタマムシ (コナラの梢掬い)、ムネアカチビナカボソタマムシ (アカメガシワの掬い)、マメチビタマムシ (ヤブマメ)、マルガタチビタマムシ (ムクノキ)、ヤマトタマムシ (写真 1)。

一方、近隣緑地や三浦半島内に生息し、調査地にも食樹が普通に自生しており、記録出来ると予想していたが確認出来なかったタマムシ科は次のとおりである：①タブエナガタマムシ (クズを食樹として 6 月から 8 月に発生)、②シラホシナガタマムシ (ムネアカナガタマムシと同じエノキを食樹とし、近年増加傾向にあるが、細い枝より衰弱木や新しい倒木、伐採木の太口径を好むとされ、その様な環境が調査地に無かったのが原因と思われる)、③コクロナガタマムシ (カラスザンショウの枯れ枝、衰弱木に集まり、チャボヒゲナガカミキリ、タイワンメダカカミキリと同じ食樹であり、他所では同時に採集できるので単に調査不足と考えられる)、④シラケナガタマムシ (フジを食樹とし、調査区域の林縁には大きな群落が見られるが確認出来なかった)。他に、ミツボシナガタマムシ (カシ類)、ツヤケシナガタマムシ (カキ類)、オオウグイスナガタマムシ (ナラ類)、ダイミョウナガタマムシ、ホソアシナガタマムシ、アサギナガタマムシの生息が期待される。

まとめ

調査場所は、接している近隣緑地と比べても遜色の無い自然環境と思われるが、自然環境の特徴を示す「トビックス」的な甲虫類は今回見出す事は出来なかった。しかし、甲虫類の調査は、膨大な種類数と多様な生息環境を持つため、当地のような一部公園化された環境でも、継続調査する事によって新しい発見や種の減少、増加など身近な自然の変化を捉える事が出来ると思われる。



写真1 ヤマトタマムシ
(2019年6月27日)。

チョウ目 (ガ類)

ガ類については、23科122種が記録された。この種類数は、限られた調査地域および調査時間、同じ時間帯での調査等かなり限定的な条件内での調査であることを考慮すれば、かなりの種数をカバーできていると思われる。2006年以降数年にわたって米軍施設内での昆虫調査（以下「前回調査」と呼ぶ）を実施したが、その時のガ類記録種数は25科201種で、池子地区の記録は168種であったが、前回調査での池子地区の調査範囲は、今回の3倍以上あり、単純に比較することはできない。ガ類は夜間灯火に飛来するものを採集する方法が有効であるが、今回の調査ではそれが3回しか行えなかった中での結果であることを付記する。

なお、今回調査の記録種のうち8種は三浦半島初記録であった。

昆虫類は比較的小さいことや見た目の似たものが多いことから、調査では捕虫網等を用いて採集し、しかる後に種を確認（同定）し記録するのが一般的である。しかし、今回のガ類調査では、調査員の都合から捕虫網での採集は10%未満にとどまり、90%以上は写真撮影によった。撮影されたガ類のおよそ半分の個体は、久木トンネルの壁に静止していた個体である。これらは前夜トンネル内の明かりに引き寄せられた個体と考えられる。

確認種のリスト

ヒゲナガガ科

1. クロハネシロヒゲナガ *Nemophora albiantennella* Issiki
2. ホソオビヒゲナガ *Nemophora aurifera* (Butler)

ミノガ科

3. クロツヤミノガ *Bambalina* sp.

メスコバネキバガ科

4. ホソオビキマルハキバガ *Acryptolechia malacobyrsa* (Meyrick)

キバガ科

5. フジフサキバガ *Dichomeris oceanis* Meurick

セミヤドリガ科

6. セミヤドリガ *Epipomponia nawai* (Dyar)

イラガ科

7. ヒロヘリアオイラガ *Parasa lepida lepida* (Cramer)

マダラガ科

8. ホタルガ *Pidorus atratus* (Butler)

スカシバガ科

9. ヒメアトスカシバ *Nakona pernix* (Leech)

ハマキガ科

10. プライヤハマキ *Acleris affinatana* (Snellen)
11. ハイイロフユハマキ *Kwabeia razowskii* (Kawabe)
12. トビモンコハマキ *Diplocalyptis congruentana* (Kennel)
13. ホソバチビヒメハマキ *Lobesia aeolopa* Meyrick
14. アシプトヒメハマキ *Cryptophlebia ombrodelta* (Lower)

15. ヨツズジヒメシクイ *Grapholita delineana* (Walker)

ハマキモドキガ科

16. コウゾハマキモドキ *Choreutis hyligenes* (Butler)

マドガ科

17. アカジママドガ *Striglina cancellata* (Christoph)
18. マドガ *Thyris usitata* Butler
19. チビマダラマドガ *Rhodoneura erecta* (Leech)

メイガ科

20. アカマダラメイガ *Oncocera semirubella* (Scopoli)

ツトガ科

21. シロエグリツトガ *Glaucocharis exsectella* (Christoph)
22. キボシオオメイガ *Patissa fulvosparsa* (Butler)
23. ヒトスジオオメイガ *Scirpophaga lineata* (Butler)
24. クビシロノメイガ *Piletocera aegimiusalis* (Walker)
25. コガタシロモンノメイガ *Piletocera sodalis* (Leech)
26. シロオビノメイガ *Spoladea recurvalis* (Fabricius)
27. クロスジノメイガ *Thypanodes striatus striatus* (Butler)
28. マエウスキノメイガ *Omiodes indicatus* (Fabricius)
29. ウスイロキンノメイガ *Pleuroptya punctimarginalis* (Hampson)

30. マツノゴマダラノメイガ *Conogethes pinicolalis*
Inoue et Yamanaka
31. ワタヘリクロノメイガ *Diaphania indica*
(Saunders)
32. ワモンノメイガ *Nomophila noctuella* (Denis et
Schiffmüller)
33. アカウスグロノメイガ *Bradina angustalis*
pryeri Yamanaka
34. モンキクロノメイガ *Herpetogramma luctuosale*
zelleri (Bremer)
35. キアヤヒメノメイガ *Diasemia accalis* (Walker)
36. モンシロルリノメイガ *Uresiphita tricolor*
(Butler)
- カギバガ科
37. フタテンシロカギバ *Ditrigona virgo* (Butler)
- ツバメガ科
38. ギンツバメ *Acropteris iphiata* (Guenée)
- シャクガ科
39. フタホシシロエダシャク *Lomographa*
bimaculata subnotata (Warren)
40. クロハグルマエダシャク *Synegia esther* Butler
41. スカシエダシャク *Krananda semihyalina* Moore
42. ヒロオビトンボエダシャク *Cystidia*
truncangulata Wehrli
43. シロジマエダシャク *Euryobeidia languidata*
languidata (Walker)
44. ナカウスエダシャク *Alcis angulifera* (Butler)
45. シロテンエダシャク *Cleora leucophaea*
leucophaea (Butler)
46. ウストビスジエダシャク *Ectropis aigneri* Prout
47. ヒロバフユエダシャク *Larerrannis miracula*
(Prout)
48. キオビゴマダラエダシャク *Biton panterinaria*
sychnospilas (Prout)
49. ハスオビエダシャク *Descoreba simplex* Butler
50. モンシロツマキリエダシャク *Xerodes albonotaria*
albonotaria (Bremer)
51. ウコンエダシャク *Corymica pryeri* (Butler)
52. ウスキツバメエダシャク *Ourapteryx nivea*
Butler
53. ホソウスバフユシャク *Inurois fumosa* (Inoue)
54. ナミガタウスキアオシャク *Jodis lactearia*
(Linnaeus)
55. ヒメツバメアオシャク *Maxates protrusa* (Butler)
56. ナミスジコアオシャク *Idiochlora ussuriaria*
ussuriaria (Bremer)
57. コベニスジヒメシャク *Timandra comptaria*
Walker
58. シロモンウスチャヒメシャク *Organopoda*
carnearia carnearia (Walker)
59. クロテンシロヒメシャク *Scopula apicipunctata*
(Christoph)
60. ヤスジマルバヒメシャク *Scopula floslactata*
claudata (Prout)
61. ウスキクロテンヒメシャク *Scopula ignobilis*
(Warren)
62. シロシタコバネナミシャク *Trichopteryx*
fastuosa Inoue
63. フタトビスジナミシャク *Xanthorhoe*
hortensiararia (Graeser)
64. ツマキシロナミシャク *Gandaritis whitelyi*
leechi (Inoue)
65. ウストビモンナミシャク *Eulithis ledereri* (Bremer)
66. セスジナミシャク *Evecliptopera illitata illitata*
(Wileman)
67. キムジシロナミシャク *Asthenes corculina* Butler
68. アカモンコナミシャク *Palpoctenidia*
phoenicosoma semilauta Prout
69. ソトカバナミシャク *Eupithecia signigera* Butler
70. クロスジアオナミシャク *Chloroclystis v-ata*
(Haworth)
- カイコガ科
71. クワコ *Bombyx mandarina mandarina* (Moore)
- スズメガ科
72. モモスズメ *Marumba gaschkewitschii*
echephron (Boisduval)
73. クルマスズメ *Ampelophaga rubiginosa rubiginosa*
Bremer et Grey
74. ヒメクロホウジャク *Macroglossum bombylans*
Boisduval
75. ホシホウジャク *Macroglossum pyrrhosticta*
Butler
- シャチホコガ科
76. オオエグリシャチホコ *Pterostoma gigantina*
Staudinger
77. ウスキシャチホコ *Mimopydna pallida* (Butler)
78. モンクロシャチホコ *Phalera flavescens* (Bremer
et Grey)
79. シャチホコガ *Stauropus fagi persimilis* Butler
80. オオトビモンシャチホコ *Phalerodonta manleyi*
manleyi (Leech)

ドクガ科

81. リンゴドクガ *Calliteara pseudabietis pseudabietis* (Butler)
82. ヒメシロモンドクガ *Orgyia thyellina* Butler
83. カシワマイマイ *Lymantria mathura aurora* Butler
84. モンシロドクガ *Sphrageidus similis* (Fuessly)

ヒトリガ科

85. スジベニコケガ *Barsine striata striata* (Bermer et Grey)
86. クワゴマダラヒトリ *Lemyra imparilis* (Butler)
87. カノコガ *Amata fortunei fortunei* (Orza)

コブガ科

88. カマフリンガ *Macrochthonia fervens* Butler
89. アミメリンガ *Sinna extrema* (Walker)

ヤガ科

90. フタテンチビアツバ *Neachrostia bipuncta* Sugi
91. クロキシタアツバ *Hypena amica* (Butler)
92. タイワンキシタアツバ *Hypena trigonalis* (Guenée)
93. トビモンアツバ *Hypena indicatalis* Walker
94. アオアツバ *Hypena subcyanea* Butler
95. ヤマガタアツバ *Bomolocha stygiana* (Butler)
96. ウスモイロアツバ *Olulis ayumiae* Sugi
97. オオシラホシアツバ *Edessena hamada* (Felder et Rogenhofer)
98. ハナマガリアツバ *Hadennia incongruens* (Butler)
99. キイロアツバ *Treitschkendia helva* (Butler)

100. フシキアツバ *Herminia dolosa* Butler
101. オスグロトモエ *Spirama retorta* (Clerck)
102. ハグルマトモエ *Spirama helicina* (Hübner)
103. プライヤキリバ *Goniocraspidum pryeri* (Leech)
104. モクメクチバ *Perinaenia accipiter* (Felder et Rogenhofer)
105. ナカグロクチバ *Grammodes geometrica* (Fabricius)
106. オオウンモンクチバ *Mocis undata* (Fabricius)
107. ウンモンクチバ *Mocis annetta* (Butler)
108. ニセウンモンクチバ *Mocis ancilla* (Warren)
109. エゾコヤガ *Chorsia noloides* (Butler)
110. ウスアオモンコヤガ *Bryophilina mollicula* (Graeser)
111. フクラスズメ *Arcte coerulea* (Guenée)
112. リンゴケンモン *Acronicta intermedia* (Warren)
113. ナシケンモン *Acronicta rumicis* (Linnaeus)
114. トビイロトラガ *Sarbanissa subflava* (Moore)
115. カラスヨトウ *Amphipyra livida corvina* Motschulsky
116. オオタバコガ *Helicoverpa armigera armigera* Hübner
117. チャオビヨトウ *Niphonyx segregata* (Butler)
118. スジキリヨトウ *Spodoptera depravata* (Butler)
119. キバラモクメキリガ *Xylena formosa* (Butler)
120. カブラヤガ *Agrotis segetum* (Denis et schiffmüller)
121. ウスチャヤガ *Xestia dilatata* (Butler)

特筆すべき種等について

三浦半島初記録の8種の画像を掲載する。写真2、4～7の撮影場所は久木トンネル(図1の②)の壁面である。



写真1 クロハネシロヒゲナガ
(本文 No.1, 2018年5月10日).



写真2 ハイイロフユハマキ
(本文 No.11, 2019年2月14日).



写真3 チビマダラマドガ
(本文 No.19, 2018年7月31日).



写真4 キボシオオメイガ
(本文 No.22, 2018年6月14日).



写真5 ヒトスジオオメイガ
(本文 No.23, 2018年7月9日).



写真6 アカモンコナミシャク
(本文 No.68, 2018年4月12日).



写真7 キムジンロナミシャク
(本文 No.67, 2018年9月28日).



写真8 ナカグロクチバ
(本文 No.105, 2018年9月28日).

まとめ

昆虫は膨大な種類数と広い生息環境を持つため、それを調査するには何十年というスパンで行わないと、一部の成果から判断してしまうと、表層的な結果を導くことになる可能性が高い。比較的自然が保たれた池子のフィールドでの調査を、中途半端なものに終わらせるのは誠にもったいない。ぜひ永続的な調査をさせていただきたく願する。

チョウ目 (チョウ類)

チョウ類の観察調査は目視および採集によって行い、成虫で47種、卵で4種、幼虫で13種、蛹で1種を記録した。観察数では、成虫が2,133、卵が14、幼虫が133、蛹が5となった(下表を参照)。

観察数の最も多かった種を科別にみると、アゲハチョウ科ではアオスジアゲハ、シロチョウ科ではスジグロシロチョウ、シジミチョウ科ではヤマトシジミ、タテハチョウ科ではキタテハ(タテハチョウ亜科)、テングチョウ(テングチョウ亜科)、ヒメウラナミジャノメ(ジャノメチョウ亜科)、セセリチョウ科ではイチモンジセセリであった。

一方、最も少なかった種を科別にみると、アゲハチョウ科ではオナガアゲハ、シロチョウ科ではツマキチョウ、シジミチョウ科ではミズイロオナガシジミ、タテハチョウ科ではゴマダラチョウ(タテハチョウ亜科)、ヒメジャノメ(ジャノメチョウ亜科)、セセリチョウ科でチャバネセセリであった。オナガアゲハは食樹コクサギが、周辺地域では多く見られるものの調査地内では少ないことが関係している。ツマキチョウは4月に年1回しか現れないため観察数が少なかったことが原因とみられ、ミズイロオナガシジミは調査地内での生息数が少なかったためと考えられる。ゴマダラチョウは食樹エノキの大木の根元廻りの落ち葉で幼虫が越冬することから、清掃されたか風で飛ばされたかで根際に落ち葉がほとんどなかったことが観察数の少なさの原因と考えられる(一方、アカボシゴマダラは食樹エノキの小木を主に利用するため数を増やしている)。ヒメジャノメは明るい林縁を好む種であり、調査地内の山林が暗いことが観察数の少なさと関係があると考えられ、暗所を好むコジャノメの観察数が少なくなかったこともそれを裏付ける。チャバネセセリは周辺では10月以降に多く見られるものの、今回の調査では目撃例が少なかった。

表 記録した種および観察数

科名・確認種番号・和名・学名	観察数			
	成虫	幼虫	蛹	卵
セセリチョウ科				
1. ダイミョウセセリ <i>Daimio tethys tethys</i>	12	2		
2. コチャバネセセリ <i>Thoressa varia varia</i>	19	2		
3. キマダラセセリ <i>Patanthus flavua flavus</i>	16			
4. チャバネセセリ <i>Pelopidas mathias oberthuri</i>	10			
5. イチモンジセセリ <i>Parnara guttata guttata</i>	157			
アゲハチョウ科				
6. ジャコウアゲハ <i>Byasa alcimous alcimous</i>	13	1		1
7. キアゲハ <i>Papilio machaon hipopocrates</i>	10			1
8. アゲハチョウ <i>Papilio xuthus xuthus</i>	11	1		
9. クロアゲハ <i>Papilio protenor demetrius</i>	7			
10. オナガアゲハ <i>Papilio macilenthus macilenthus</i>	2			
11. ナガサキアゲハ <i>Papilio memnon thunbergii</i>	29	2		
12. モンキアゲハ <i>Papilio helenus nicconicolens</i>	36	1		
13. カラスアゲハ <i>Papilio dehaanii dehaanii</i>	20			
14. アオスジアゲハ <i>Graphium sarpedon nipponum</i>	80			
シロチョウ科				
15. キタキチョウ <i>Eurema mandarina mandarina</i>	93			
16. モンキチョウ <i>Colias erate poliographus</i>	51			
17. ツマキチョウ <i>Anthocharis scolymus scolymus</i>	11			
18. モンシロチョウ <i>Pieris rapae crucivora</i>	86			
19. スジグロシロチョウ <i>Pieris melete melete</i>	115			

科名・確認種番号・和名・学名	観察数			
	成虫	幼虫	蛹	卵
シジミチョウ科				
20. ウラギンシジミ <i>Curetis acuta paracuta</i>	54			3
21. ムラサキツバメ <i>Narathura bazalus turbata</i>	28			
22. ムラサキシジミ <i>Narathura japonica japonica</i>	29	14		
23. ウラゴマダラシジミ <i>Artopoetea pryeri pryeri</i>	16		5	
24. ミズイロオナガシジミ <i>Antigius attilia attilia</i>	2			
25. アカシジミ <i>Japonica lutea lutea</i>	6			
26. ウラナミアカシジミ <i>Japonica saepestriata saepestriata</i>	29			
27. オオミドリシジミ <i>Favonius orientalis orientalis</i>		3		9
28. トラフシジミ <i>Rapala arata arata</i>	8			
29. ベニシジミ <i>Lycaena phlaeas daimio</i>	109			
30. ウラナミシジミ <i>Lampides boeticus boreticus</i>	16			
31. ヤマトシジミ <i>Zizeeria maha argia</i>	311			
32. ツバメシジミ <i>Everes argiades argiades</i>	73			
33. ルリシジミ <i>Celastrina argiolus ladonides</i>	87			
タテハチョウ科				
34. テングチョウ <i>Libythea lepita celtoides</i>	147	1		
35. ツマグロヒョウモン <i>Argyreus hyperbius</i>	23			
36. イチモンジチョウ <i>Ladoga comilla japonica</i>	6			
37. コミスジ <i>Neptis sappho intermedia</i>	47			
38. キタテハ <i>Polygonia c-aureum</i>	65			
39. ルリタテハ <i>Kaniska canae nojaponicum</i>	16			
40. アカタテハ <i>Vanessa indica</i>	14	16		
41. アカボシゴマダラ <i>Hestina assimilis assimilis</i>	26	32		
42. ゴマダラチョウ <i>Hestina japonica japonica</i>	2	6		
43. ヒメウラナミジャノメ <i>Ypthima argus argus</i>	130			
44. ヒカゲチョウ <i>Lethe sicelis sicelis</i>	32			
45. サトキマダラヒカゲ <i>Neope goschkevitschii goschkevitschii</i>	17			
46. ヒメジャノメ <i>Mycalesis gotama fulginia</i>	2			
47. コジャノメ <i>Mycalesis francisca perdiccas</i>	13			
48. クロコノマチョウ <i>Melanitis phedina oitensis</i>	51	53		

特筆すべき種等について

タテハチョウ科（タテハチョウ亜科）ではイチモンジチョウもまた少なかったが、本種は三浦半島全体でみても減少しており原因は不明である。シジミチョウ科のトラフシジミ（写真1）も少ないが三浦半島でみても個体数は少ない。一方、同科のアカシジミの観察数が少なかったのは、地域差によるものと考えられる。

成虫は見られなかったが、オオミドリシジミ（写真2）は卵および幼虫を2年続けて観察した。2018年4月12日に2頭採集した終齢幼虫からは、飼育の結果2♀の羽化を確認した。2019年4月11日に同じコナラ中木で3齢幼虫が目撃された。本種の成虫は活動時間が早朝のため観察こそできなかったが、

生息は確実と考えられる。

調査地の近隣で生息が確認されていながら観察されなかった種には、ヒメアカタテハ（写真3）、アオバセセリ、アサギマダラ、ジャノメチョウが挙げられる。ヒメアカタテハは成虫が前回および今回調査で記録できなかったが、本調査期間外である2019年8月21日に、調査地内の舗装道路脇の刈り込まれた草地の中のヨモギで当会の調査員によって4齢～終齢の幼虫6頭を観察したことから、今後の調査では正式に記録される可能性が高い。アオバセセリは前回調査では1度観察されたものの、今回は観察されなかった。隣接する鎌倉市十二所には発生地があり、本調査実施日外である2019年4月13日には調査地

内で当会会員でもある山浦安曇氏が目撃していることから、今後も飛来する可能性がある。アサギマダラは、食草として有名なキジョランが調査地内で確認されていないが、食草であるガガイモが自生しているので発生の可能性はある。本種はまた移動性が強く、本調査実施日外である2017年7月12日には、

当会会員でもある田中和徳氏によって目撃されており、今後も見られる可能性がある。ジャノメチョウは前回調査では記録されているものの今回調査では観察できなかった。しかし、2016年7月12日に園内で前出の田中氏によって目撃されているので生息している可能性がある。

まとめ

調査場所内の草地は、多くのチョウ類を育む食草の生育が期待される一方、こうした草地を画一的に短く刈り込んでしまっている現状の管理は、チョウ類の生息への支障が懸念される。特に、林縁は食草だけでなく食樹の幼木も生育する適地であることから、草地の管理では注意が望まれる。

ウラゴマダラシジミ（写真4）は三浦半島で減少著しい種である一方、食樹イボタノキは調査地内には少ないので、食樹の保護が望まれる。前出のオオミドリシジミの幼虫が観察されたコナラの中木が、2019年6月に伐採されてしまった。調査地内では卵および幼虫でしか観察されておらず、2年にわたって発生を見守ってきたことから、伐採は非常に残念であった。チョウ類に限らず、食草・食樹として植物に依存する昆虫の生息環境の保全には、植物調査や植栽管理の各担当者との連絡調整が重要であり、ぜひお願いしたいと考える。



写真1 トラフシジミ（夏型）
（2019年6月27日）.



写真2 オオミドリシジミ幼虫
（2018年4月12日）.



写真3 ヒメアカタテハ幼虫（ヨモギ）
（2019年8月21日 ※調査日外）.



写真4 ウラゴマダラシジミ
（2019年5月30日 ※調査日外）.

カメムシ目

この報告書で扱うカメムシ目は異翅亜目、頸吻亜目のみとし、今回の調査では異翅亜目を74種、頸吻亜目を22種、全体として32科96種を記録した。なお、前報では異翅亜目は103種、頸吻亜目は28種を記録した。特に、水生半翅類においては、小川の源流部や奥の池沼などが調査出来なかったことで、前報の8種に比して今回は6種にとどまった。

調査期間の長短や調査場所の相違などから一概に比較は出来ないが、今回の調査は前報に比べ、2年間と短い調査期間にもかかわらず、25種を新たに記録した。これは複数の調査員で本目を観察した結果であり、この点においても調査の意義が実感された。

確認種のリスト

異翅亜目

メミズムシ科

1. メミズムシ *Ochterus marginatus* (Latrille)

マツモムシ科 Notonectidae

2. コマツモムシ *Anisops ogasawarensis* Matsumura

アメンボ科

3. シマアメンボ *Metrocoris histrio* (White)
4. アメンボ *Aquarius paludum paludum* (Fabricius)
5. ヒメアメンボ *Gerris (Gerris) latiabdominis* Miyamoto
6. ヤスマツアメンボ *Gerris (Macrogerris) insularis* (Motschulsky)

カスミカメムシ科

7. ヒョウタンカスミカメ *Pilophorus setulosus* Horváth
8. モンキクロカスミカメ *Deraeocoris ater* Jakovlev
9. クロバカスミカメ *Apolygus nigrifulus* (Linnavuori)
10. コアオカスミカメ *Apolygus lucorum* (Meyer-Dur)

ゲンバイムシ科

11. アワダチソウゲンバイ *Corythucha marumorata* (Uhler)
12. ヤブガラシゲンバイ *Cysteocheila consueta* Drake
13. ヘクソカズラゲンバイ *Dulinius conchatus* Distant
14. ツツジゲンバイ *Stephanotis pyrioides* (Scott)

マキバサシガメ科

15. アカマキバサシガメ *Gorpis brevilineatus* (Scott)

16. ハネナガマキバサシガメ *Nabis stenoferus* Hsiao

サシガメ科

17. クビグロアカサシガメ *Haematoloecha delibuta* (Distant)
18. アカシマサシガメ *Haematoloecha nigrorufa* (Stål)
19. ヨコヅナサシガメ *Agriosphodrus dohrni* (Signoret)
20. アカサシガメ *Cydnocoris russatus* Stål
21. オオトビサシガメ *Isyndus obscures* (Dallas)
22. ヒゲナガサシガメ *Serendiba staliana* (Horvath)
23. シマサシガメ *Sphedanolestes impressicollis* (Stal)
24. ヤニサシガメ *Velinus nodipes* (Uhler)
25. クロモンサシガメ *Peirates turpis* Walker

ヒゲナガカメムシ科

26. ヒゲナガカメムシ *Pachygrontha antennata* (Uhler)
27. クロスジヒゲナガカメムシ※ *Pachygrontha similis* Uhler

ヒョウタンナガカメムシ科 Rhyparochromidae

28. ヨツボシヒョウタンナガカメムシ *Gyndes pallicornis* (Dallas)
29. オオモンシロナガカメムシ *Metochus abbreviatus* (Scott)
30. チャイロナガカメムシ *Neolethaeus dallasi* (Scott)
31. モンシロナガカメムシ *Panaorus albomaculatus* (Scott)
32. チャモンナガカメムシ *Paradieuche dissimilis* (Distant)
33. コバネヒョウタンナガカメムシ *Togo hemipterus* (Scott)

オオメナガカメムシ科

34. オオメナガカメムシ *Piocori varius* (Uhler)

コバネナガカメムシ科

35. コバネナガカメムシ *Dimorphopterus pallipes* (Distant)

36. ホソコバネナガカメムシ *Macropes obnubilus* (Distant)

37. コガシラコバネナガカメムシ *Pirkimerus japonicus* (Hidaka)

マダラナガカメムシ科

38. ヒメナガカメムシ *Nysius plebeius* Distant

39. ムラサキナガカメムシ *Pylorgus colon* (Thunberg)

40. ヒメジュウジナガカメムシ *Tropidothorax sinensis* (Reuter)

オオホシカメムシ科

41. オオホシカメムシ *Physopelta gutta* (Burmeister)

42. ヒメホシカメムシ *Physopelta parviceps* Blote

ホソヘリカメムシ科

43. クモヘリカメムシ *Leptocorisa chinensis* (Dallas)

44. ホソヘリカメムシ *Riptortus clavatus* (Thunberg)

ヒメヘリカメムシ科

45. スカシヒメヘリカメムシ *Liorhyssus hyalinus* (Fabricius)

ヘリカメムシ科

46. ホオズキヘリカメムシ *Acanthocoris sordius* (Thunberg)

47. オオクモヘリカメムシ *Homoeocerus (Anacanthocoris) stricornis* Scott

48. ホソハリカメムシ *Cletus punctiger* (Dallas)

49. ホシハラビロヘリカメムシ *Homoeocerus unipunctatus* (Thunberg)

50. ツマキヘリカメムシ *Hygia (Hygia) opaca* (Uhler)

51. キバラヘリカメムシ *Plinactus bicoloripes* Scott

クヌギカメムシ科

52. ナシカメムシ *Urochela luteovaria* Distant

53. ヘラクヌギカメムシ *Urostylis annulicornis* Scott

マルカメムシ科

54. マルカメムシ *Megacopta punctatissima* (Montandon)

ツチカメムシ科

55. ツチカメムシ *Microporus japonensis* (Scott)

56. ミツボシツチカメムシ *Adomerus triguttulus* (Motschulsky)

キンカメムシ科

57. アカスジキンカメムシ *Poecilocoris lewisi* (Distant)

カメムシ科

58. ウズラカメムシ *Alcimocoris japonensis* (Scott)

59. ウシカメムシ *Alcimocoris japonensis* (Scott)

60. ブチヒゲカメムシ *Dolycoris baccarum* (Linnaeus)

61. ナガメ *Eurydema rugosa* Motschulsky

62. ムラサキシラホシカメムシ *Eysarcoris annamita* Breddin

63. マルシラホシカメムシ *Eusarcoris guttiger* (Thunberg)

64. ツヤアオカメムシ *Glaucias subpunctatus* (Walker)

65. クサギカメムシ *Halyomorpha halys* (Stal)

66. アオクサカメムシ *Nezara antennata* Scott

67. チャバネアオカメムシ *Plautia stali* Scott

68. エビイロカメムシ *Gonopsis affinis* (Uhler)

69. アカスジカメムシ *Graphosoma rubrolineatum* (Westwood)

70. イネクロカメムシ *Scotinophara lurida* (Burmeister)

ツノカメムシ科

71. セアカツノカメムシ *Acanthosoma denticaudum* Jakovlev

72. オオツノカメムシ *Acanthosoma giganteum* (Matsumura)

73. アオモンツノカメムシ *Elasmostethus nubilus* (Dallas)

74. エサキモンキツノカメムシ *Sastragala esakii* Hasegawa

頸吻亜目

セミ科

75. クマゼミ *Cryptotympana facialis* (Walker)

76. アブラゼミ *Graptopsaltria nigrofuscata* (Motschulsky)

77. ミンミンゼミ *Hyalessa maculaticollis* (Motschulsky)

78. ツクツクボウシ *Meimuna opalifera* (Walker)

79. ニイニイゼミ *Platypleura kaempferi* (Fabricius)

80. ヒグラシ *Tanna japonensis* (Distant)

コガシラアワフキムシ科

81. コガシラアワフキ *Eoscarta assimilis* (Uhler)

アワフキムシ科

82. シロオビアワフキ *Aphrophora intermedia*
Uhler

トゲアワフキムシ科

83. ムネアカアワフキ *Hindoloides bipunctata* (Haupt)

ツノゼミ科

84. トビイロツノゼミ *Machaerotypus sibiricus*
(Lethierry)

ヨコバイ科

85. ミミズク *Ledra auditura* Walker
86. ツマグロオオヨコバイ *Bothrogonia ferruginea*
(Fabricius)
87. クロスジホソサジヨコバイ *Sophonia orientalis*
(Matsumura)
88. ヒシモンヨコバイ *Hishimonus sellatus* (Uhler)
89. クロヒラタヨコバイ *Penthimia nitida* Lethierry

90. ホシヒメヨコバイ *Limassolla multipunctata*
(Matsumura)

ハネナガウンカ科

91. キスジハネビロウンカ *Rhotana satsumana*
Matsumura

ゲンバイウンカ科

92. ミドリゲンバイウンカ *Kallitaxila sinica*
(Walker)

マルウンカ科

93. マルウンカ *Gnezdilovius variabilis* (Butler)

アオバハゴロモ科

94. アオバハゴロモ *Geisha distinctissima* (Walker)
95. ベッコウハゴロモ *Orosanga japonicus*
(Melichar)
96. アミガサハゴロモ *Pochazia albomaculata*
(Uhler)

特筆すべき種等についてのコメント

ヒゲナガサシガメ [写真1]

体長 15 mm 前後の細長いサシガメ類で、神奈川県内においては 2006 年頃までは記録の無かった種である。三浦半島でもその発見は遅く 2012 年の鷹取山での発見を嚆矢とするが、その後比較的多くの個体が発見されている。池子の森に現れたのも最近のことと推測する。低灌木の叩き網採集で得られることが有る。国内分布拡大種とも言える。

オオツノカメムシ [写真2]

ツノカメムシ類は胸の側面が角状に尖ることが特徴で三浦半島からは 8 種が知られ、本種はその中で

体長 17 mm 前後と最も大きい。三浦半島での分布状況はあまり多くないと思われ、記録は散発的である。幼虫はケンポナシで育ち、池子の調査地にもケンポナシが点在していることを確認しているが、発見されたのは 1 雄のみであった。なお、成虫はミズキなどにも集まるといえるが、この地に多くあるミズキからは発見は出来なかった。

なお、ナシカメムシは (写真3) 三浦半島初記録となり、ヒシモンヨコバイ (写真4) は三浦半島 2 例目の記録である。



写真1 ヒゲナガサシガメ
(2016年11月13日 ※調査日外).



写真2 オオツノカメムシ
(2018年8月16日).



写真3 ナシカメムシ
(2019年5月23日).



写真4 ヒシモンヨコバイ
(2018年8月16日).

今後の課題

カスミカメムシ科をはじめ、昼間の調査では発見が困難なグループがあることから、夜間採集を最低3回(春、夏、秋)実施することにより、新たな知見が得られると思われる。また、樹上性半翅類の調査などのため、尾根部での調査を要望する。

ハエ目

今回の調査では17科58種を記録した。前報では21科72種を記録しており、調査期間の長短や調査場所の相違などから一概に比較は出来ないが、今回の調査は、2年間と短い調査期間にもかかわらず19種を新たに記録した。記録が顕著だったのはハナアブ類で、25種を確認した。こうした結果は複数の調査員で本目を観察した結果であり、今後の調査方法の一つの方向性を示すものと考えられるが、写真による記録が多く、標本が現存しない点は今後の課題であろう。

確認種のリスト

ガガンボ科

1. ホリカワクシヒゲガガンボ *Pselliophora bifascipennis* Brunetti
2. ミカドガガンボ *Halorysia mikado* (Westwood)
3. キイロホソガガンボ *Nephrotoma virgata* (Coquillett)
4. マダラガガンボ *Tipula (Nipoptipula) coquilletti* Enderlein
5. キリウジガガンボ *Tipula (Yamamototipula) aino* Alexander

チョウバエ科

6. ホシチョウバエ *Tinearia alternata* (Say)

ミズアブ科

7. アメリカミズアブ *Hermetia illucens* (Linnaeus)
8. ハキナガミズアブ *Rhophiocerina hakiensis* (Matsumura)
9. キイロコウカアブ *Ptecticus aurifer* (Walker)

キアブモドキ科

10. トラキアブモドキ *Xylomya shikokuana* (Miyatake)

シギアブ科

11. キアシキンシギアブ *Chrysopilus ditissimis* Bezzi
12. ヤマトシギアブ *Rhagio japonicus* Matsumura

アブ科

13. アカウシアブ *Tabanus chrysurus* Loew
14. ウシアブ *Tabanus trigonus* Coquillett

ツリアブ科

15. ビロウドツリアブ *Bombylius major* Linnaeus
16. クロバネツリアブ *Ligyra tantalus* (Fabricius)

ムシヒキアブ科

17. イッシキイシアブ *Choerades issikii* (Matsumura)
18. オオイシアブ *Laphria mitsukurii* Coquillett
19. アオメアブ *Cophinopoda chinensis* (Fabricius)
20. シオヤアブ *Promachus yesonicus* Bigot

21. ナミマガリケムシヒキ *Neoitamus angusticornis* (Loew)

アシナガバエ科

22. マダラホソアシナガバエ *Mesorhaga nebulosus* (Matsumura)

ハナアブ科

23. オオヒメヒラタアブ *Allograpta (Allograpta) iavana* (Wiedemann)
24. クロヒラタアブ *Betasyrphus serarius* (Wiedemann)
25. ホソヒラタアブ *Episyrphus (Episyrphus) balteatus* (de Geer)
26. ナミホシヒラタアブ *Eupeodes (Eupeodes) bucculatus* (Rondani)
27. フタホシヒラタアブ *Eupeodes (Metasyrphus) corollae* (Fabricius)
28. ミナミヒメヒラタアブ *Sphaerophoria indiana* Bigot
29. ホソヒメヒラタアブ *Sphaerophoria macrogaster* (Thomson)
30. マガイヒラタアブ *Syrphus dubius* Matsumura
31. ツماغロコシボソハナアブ *Allobaccha apicalis* (Loew)
32. ホソツヤヒラタアブ *Melanostoma mellinum* (Linnaeus)
33. ニッポンクロハナアブ *Cheilosia japonica* (Herve-Bazin)
34. ベッコウハナアブ *Volucella jeddona* Bigot
35. クロベッコウハナアブ *Volucella nigricans* Coquillett
36. スイセンハナアブ *Merodon equestris* (Fabricius)
37. キゴシハナアブ *Eristalinus (Lathyrrophthalmus) quinquestriatus* (Fabricius)

38. シマハナアブ *Eristalis (Eoseristalis) cerealis*
Fabricius
39. キョウコシマハナアブ *Eristalis (Eoseristalis)*
kyokoae Kimura
40. ナミハナアブ *Eristalis (Eristalis) tenax* (Linnaeus)
41. オオハナアブ *Phytomyia zonata* (Fabricius)
42. アシボトハナアブ *Helophilus (Helophilus)*
eristaloideus (Bigot)
43. アシボソミケハラブトハナアブ *Mallota munda*
Violovitsh
44. タカサゴハラブトハナアブ *Mallota*
takasagensis Matsumura
45. ナミルリイロハラナガハナアブ *Xylota*
amamiensis Shiraki
46. キンアリノスアブ *Microdon (Microdon)*
auricomus Coquillett
47. アリノスアブ *Microdon (Microdon) japonicus*
Yano
- メバエ科
48. マダラメバエ *Myopa buccata* (Linnaeus)
- ミバエ科
49. ミツボシハマダラミバエ *Proanoplomus japonicus*
Shiraki
50. ミスジミバエ *Bactrocera (Zeugodacus) scutellata*
(Hendel)
51. ハルササハマダラミバエ *Paragastrozona*
japonica (Miyake)
- シマバエ科
52. ヒラヤマシマバエ *Homoneura hirayamae*
(Matsumura)
- ベッコウバエ科
53. ベッコウバエ *Dryomyza formosa* (Wiedemann)
- ミギワバエ科
54. ミナミカマバエ *Ochthera (Ochthera) circularis*
Cresson
- クロバエ科
55. ケブカクロバエ *Aldrichina grahami* (Aldrich)
56. オオクロバエ *Calliphora (Calliphora) nigribarbis*
Vollenhoven
57. ツマグロキンバエ *Stomorhina obsoleta*
(Wiedemann)
- ヤドリバエ科
58. (和名なし) *Tachina micado* (Kirby)

以上の他、ガガンボ科、イエバエ科、クロバエ科、ニクバエ科、ヤドリバエ科等で複数種を採集しているが、同定不確実のため割愛した。

特筆すべき種等についてのコメント

アシボソミケハラブトハナアブ

本種は写真により判定したが、ハラブトハナアブ類でも特有の体色で間違いないと思われる。胸から腹部にかけて文字通り三色の毛で覆われている大型のハナアブである。神奈川県からは大磯町に次いで2例目となる貴重な発見となった。

ベッコウハナアブとクロベッコウハナアブ

ハナアブの仲間としては大型種(体長 20 mm)で、腹部が大きい。春先、ウツギの花に群がる様子は壮観である。三浦半島にはもう1種シロスジベッコウハナアブが生息しているが、池子からは記録できなかった。なお、生態面では不明の点が多かったが、スズメバチ類の巣に寄生することが分かってきた。特に、スズメバチ類の排泄物を幼虫が食するという。

スイセンハナアブ

本種はスイセン等の根とともに日本に侵入した外来種で、1980年頃全滅したと報じられたが、その後再びあちこちで発見が相次ぎ、現在では春から多く見られる。本種は基本的には三色の色彩変異が見られ、一見、別種と見誤ることがある。写真は橙褐色型で、黒色型や中間型などがある。三浦半島近辺ではスイセンのほかユリなどを食害していると推測される。

アリノスアブ(写真1)

体長 14 mm 前後の中型のハナアブで、近縁のキンアリノスアブも居る。名前のようにアリの巣に入り込み寄生する。最近の研究では、アリノスアブとアリとの関係が明らかになってきている。

今後の課題

今回の調査では本目の記録は少ない印象を受けた。これは前述のとおり前回調査との調査範囲の違いなどもあるが、調査範囲に様々な環境が含まれなかったことや、調査地域の公園化によって草本が整理されず

ぎってしまったことも一因として挙げる。池子地域の公園化はやむを得ないことであるが、ある一角だけでも草刈りをしない地域を残したり、草刈りをするにあたって、草丈を地上高 20 cm にするなどの試みを希望する。ハナアブ類は後述のハチ類とともにポリネーター（花粉媒介者）として重要であり、在来キク科植物を主体にした花壇を整備するなどにより、こうした種をより多く呼び込めると思われる。

夜間のライトトラップでは、昼間には見られない本目の種が得られる可能性が高いため、本目の追加調査では、このような手法もご検討いただきたい。



写真1 アリノスアブ
(2019年5月23日).

ハチ目 (有剣類のみ)

ヒメバチ類やハバチ類に関しては、採集数やその後の同定も不十分なため割愛し、今回の調査では有剣類のみの報告とする。記録は11科53種で、前回調査は11科56種であり、その殆どは三浦半島に普通に分布している既知種であった。なお、前回の調査結果は、鈴木(2017)を参照願いたい。調査期間の長短や調査場所の相違などから一概に比較は出来ないが、今回の調査は、2年間と短い調査期間にもかかわらず、20種を新たに記録した。こうした結果は複数の調査員で本目を観察した結果であり、今後の調査方法の一つの方向性を示すものと考えられるが、写真による記録が多く、標本が現存しない点は今後の課題であろう。

確認種のリスト

セイボウ科

1. クロバネセイボウ *Chrysis angolensis murasaki*
Uchida

コッチバチ科

2. ニカコッチバチ *Tiphia sternata* Parker

ツチバチ科

3. ヒメハラナガツチバチ *Campsomeriella annulata annulata* (Fabricius)
4. キンケハラナガツチバチ *Megacampsomeris prismatica* (Smith)
5. シロオビハラナガツチバチ *Megacampsomeris schulthessi* Betrem
6. コモンツチバチ *Scolia decorata ventralis* Smith
7. キオビツチバチ *Scolia oculata* (Matsumura)

クモバチ科

8. ベッコウクモバチ *Cyphononyx fulvognathus* (Rohwer)
9. オオモンクロクモバチ *Anoplius samariensis* (Pallas)
10. オオシロフクモバチ *Episyron arrogans* (Smith)

スズメバチ科

11. オオフトオビドロバチ *Anterhynchium flavomarginatum micado* (Kirsch)
12. ミカドトックリバチ *Eumenes micado* Cameron
13. スズバチ *Oreumenes decoratus* (Smith)
14. カタグロチビドロバチ *Stenodynerus chinensis kalinowskii* (Radoszkowski)
15. ムモンホソアシナガバチ *Parapolybia crocea* Saito-Morooka, Nguyen & Kojima
16. ヤマトアシナガバチ *Polistes japonicus* Saussure
17. セグロアシナガバチ *Polistes jokahamae jokahamae* Radoszkowski
18. キアシナガバチ *Polistes rothneyi iwatai* Vecht

19. コガタスズメバチ *Vespa analis insularis* Dalla Torre

20. オオスズメバチ *Vespa mandarinia japonica* Radoszkowski

21. キイロスズメバチ *Vespa simillima xanthoptera* Cameron

22. ナミクロスズメバチ *Vespula flaviceps lewisii* (Cameron)

アナバチ科

23. ルリジガバチ *Chalybion japonicum* (Gribodo)

24. ニッポンモンキジガバチ *Sceliphron deform nipponicum* Tsuneki

25. キゴシジガバチ *Sceliphron madraspatanum kohli* Sickmann

26. コクロアナバチ *Isodontia nigella* (Smith)

27. サトジガバチ *Ammophila vagabunda* Smith

ギングチバチ科

28. ケシジガバチモドキ *Trypoxylon exiguum exiguum* Tsuneki

29. シロスジギングチバチ *Ectemnius iridifrons* (Perez)

ムカシハナバチ科

30. パバムカシハナバチ *Colletes babai* Hirashima et Tadauchi

ヒメハナバチ科

31. アブラナマメヒメハナバチ *Andrena semirugosa brassicae* Hirashima

32. コガタウツギヒメハナバチ *Andrena tsukubana* Hirashima

33. シロヤヨイヒメハナバチ *Andrena luridiloma* Strand

コハナバチ科

34. ホクダイコハナバチ *Lasioglossum (Evyllaesus) duplex* (Dalla Torre)

35. シロスジカタコハナバチ *Lasioglossum*
(*Lasioglossum*) *occidens* (Smith)
36. アオスジハナバチ *Nomia incerta* Gribodo
ハキリバチ科
37. ヤノトガリハナバチ *Coelioxys yanonis*
Matsumura
38. ハラアカヤドリハキリバチ *Euaspiis basalis*
(Ritsema)
39. ツルガハキリバチ *Megachile tsurugensis*
Cockerel
40. バラハキリバチ *Megachile nipponica nipponica*
Cockerel
41. ヒメハキリバチ *Megachile spissula* Cockerel
42. オオハキリバチ *Megachile sculpturalis* Smith
ミツバチ科
43. キオビツヤハナバチ *Ceratina flavipes* Smith

44. キムネクマバチ *Xylocopa appendiculata*
circumvolans Smith
45. ギンランキマダラハナバチ *Nomada ginran*
Tsuneki
46. ダイミョウキマダラハナバチ *Nomada japonica*
Smith
47. シロスジヒゲナガハナバチ *Eucera* (*Eucera*)
spurcatipes (Pérez)
48. ニッポンヒゲナガハナバチ *Eucera* (*Synhalonia*)
nipponensis (Pérez)
49. ナミルリモンハナバチ *Thyreus decorus* (Smith)
50. ニホンミツバチ *Apis cerana japonica*
Radoszkowski
51. セイヨウミツバチ *Apis mellifera* Linnaeus
52. コマルハナバチ *Bombus ardens ardens* Smith
53. トラマルハナバチ *Bombus diversus diversus* Smith

特筆すべき種等についてのコメント

ベッコウクモバチ

本種が属する科は従来ベッコウバチと言われていたが、ほとんどの種が幼虫の餌としてクモを狩るということでクモバチ科に統一された。三浦半島に生息する多くの種の中で、本種は体長 25 mm 前後と大型である。ハシリグモ類を狩る。翅は外側のみ黒色で他は黄褐色、脚も黄色で、野外での探索においてはよく目立つ。

ルリジガバチ

ジガバチの仲間は三浦半島には 7 種記録されるが、その中でも本種の個体数は多い。文字通り瑠璃色を

した光沢のある体長 20 mm のスリムなハチで、ジョロウグモ、ナガコガネグモなどのクモ類の幼生を餌として狩る。池子の調査地ではよく見られる。

ナミルリモンハナバチ (写真1)

腹部に不明瞭な瑠璃色の縞模様をもった体長 13 mm 前後のハチ。秋に出現する。池子でも多くはないがアキノタムラソウなどに飛来する。幼虫はフトハナバチの仲間の巣に寄生すると言われる。

今後の課題

今回の調査ではヒメバチ類やハバチ類を除いたが、これらの収集と同定を精度よく実施することにより、当地における本目の実態が解明されるであろう。なお、追加調査にあたっては調査範囲の拡大を要望する。ハエ目でも述べたとおり、本目の多くの種はハナアブ類とともにポリネーター（花粉媒介者）として重要であり、在来キク科植物を主体にした花壇を整備するなどにより、こうした種をより多く呼び込めると思われる。



写真1 ナミルリモンハナバチ
(2019年8月29日 ※調査日外)。

カワゲラ目、ナナフシ目、カマキリ目、ゴキブリ目、チャタテムシ目、
アミメカゲロウ目、シリアゲムシ目、トビゲラ目

カワゲラ目：1科1種

カワゲラ科

フタツメカワゲラ属の1種が観察された。前報でも同種と思われる1種の記録にとどまる。

ナナフシ目：2科2種

2科2種が確認された。前報ではナナフシモドキ1種の記録にとどまる。いずれも現在、三浦半島に生息する主要なナナフシ類である。これ以外に1～2種が生息する可能性が否定できないものの、本調査で得られた記録から特筆すべき事項はない。

ナナフシモドキ科 (旧：ナナフシ科)

1. ナナフシモドキ *Ramulus mikado* (Rehn)

トビナナフシ科

2. トゲナナフシ *Neohirasea japonica* (de Haan)

カマキリ目：1科5種

1科5種が確認された。前報ではカマキリ以外の4種の記録にとどまる。三浦半島ではこれ以外に別科ヒメカマキリも記録されているが、本調査では確認できなかった。いずれの種類も三浦半島では珍しいものではなく、特筆すべき事項はない。

カマキリ科

1. ヒナカマキリ *Amantis nawai* (Shiraki)
2. コカマキリ *Statilia maculata* (Thunberg)
3. オオカマキリ *Tenodera sinensis* Saussure
4. カマキリ *Tenodera angustipennis* Saussure
5. ハラビロカマキリ *Hierodura patellifera* (Audinet-Serville)

ゴキブリ目：1科1種

1科1種が確認された。前報では本種を含む1科3種が記録された。これは調査不足によるものであり、実際には7～8種は生息しているのではないかと考えられる。調査不足であることから特筆すべき事項はない。

チャバネゴキブリ科

1. モリチャバネゴキブリ *Blattella nipponica* Asahina

チャタテムシ目：1科1種

ウロコチャタテ科

オオウロコチャタテ *Stimulopalpus japonicus* Enderlein とと思われる個体が確認された。前報ではチャタテ科とみられる1種のみが記録されているに過ぎない。

アミメカゲロウ目：1科1種

ウスバカゲロウ科

コマダラウスバカゲロウ *Gatzara jezoensis* (Okamoto) の繭殻が1月に池脇の地衣類のある崖地で確認された。前報では同科別種を含む4科4種が記録されている。

シリアゲムシ目：2科2種

シリアゲムシ科

ヤマトシリアゲ *Panorpa japonica* Thunberg が4月～10月において確認された。前報でも確認されている。

ガガンボモドキ科

ヤマトガガンボモドキ *Bittacus takaoensis* Miyake が確認された。前報でも確認されている。

トビケラ目：1科1種

エグリトビケラ科

ホタルトビケラ *Nothopsyche ruficollis* (Ulmer) が11月に観察された。前報では同種を含む6科6種が記録されている。

逗子市役所緑政課 協力事業
池子の森自然公園 昆虫類調査報告書
(2020年6月30日版)

執筆・編集 三浦半島昆虫研究会

